

兩岸四地の“ボーダー”とポピュリストの台頭

香港、マカオ、台湾では、中国本土との経済関係の緊密化を背景にポピュリズムの噴出がみられる。それはブルジョア民主主義に基づく独立国家の伝統を持たない地域だからこそ、グローバル化の進展に伴いもう一つの民主主義を担う「グローバル・シチズン」の急激な台頭を示すシグナルになっているという意味において注目に値する。

ヤン・ヴェルナー・ミュラーによれば、ポピュリズムの本質は、反エリート主義と反多元主義である。ポピュリズムは価値観の劇的な多様化に伴い「平等な国民の国家」に疑いを持ち自らが設計したライフスタイルに忠実である人々（グローバル・シチズン）が構成する越境的な社会が生成するなかで、一部勢力が、経済統合を進めるグローバル・エリートにスケープゴートにしつつ反動的に結集する精神的動態ということができる。

香港に関して今日的意義の点で重要なのは、2003年頃に起こった政治的、心理的ボーダーの変化である。2003年は、50万人デモとCEPA（中国本土・香港経済連携緊密化取決め）の発効が特筆される。香港の指導的ポピュリストは、香港生まれ、かつ主権返還の記憶を持たない若き市民であり、2014年の雨傘運動の主力となると同時に、その直後から盛り上がりを見せた中国本土からの旅行者排斥行動の中心勢力ともなった。グローバル・エリートは地域経済統合の恩恵を受ける政・財界人や中国本土の人々である。

同様の構図は2014年の台湾における「ひまわり革命」にもうかがえる。この9月に投開票されたマカオの立法会（定数33）選挙において「急進民主派」の蘇嘉豪氏（26）が最年少で初当選した要因も同様に見える。広東省は汪洋氏の広東省党委書記時代（2007～12年）、珠江デルタの「経済サービス化」を進めたが、同氏の意図はグローバル・シチズンの形成を加速することにあつたといえる。